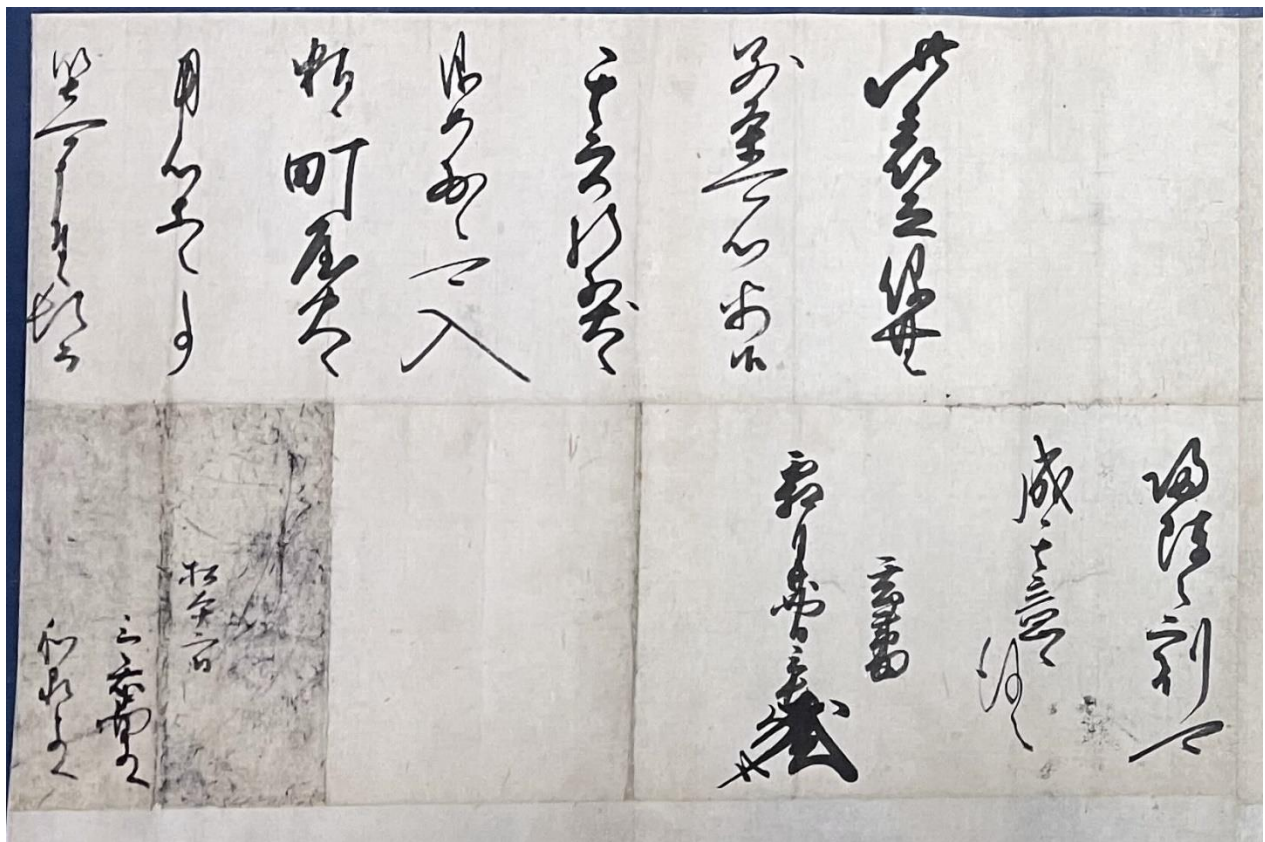


おもシロ！城郭つうしん 第8回

松林家文書 ＜石川康長の手紙＞

石川康長は石川数正の長男で、三長という名前も使っています。官職の名は玄蕃頭で、石川玄蕃頭康長（三長）と名乗りました。数正が肥前名護屋城へ行っていたことは前回お示ししたとおりです。実は息子の康長も天正19年（1591）に、500名の軍勢を率いて名護屋に在陣するように豊臣秀吉から命令を受けています。いつ名護屋に行ったかはわからないのですが、父数正と同時に在陣したと思われます。数正は天正20年（文禄元年・1592）に出発しています。おそらく康長は先に行っていたと考えられます。康長が名護屋に在陣していたことを示すのは次の手紙です。



此表儀無

別条可心安候

其元肝煎候

儀如前々可入

精候町家火之

用心等之事

堅可申付候頓而

帰陳之刻可

成其意候謹言

「こちらのことは、

特に変わることはないので

安心してほしい。

お前たちの名主の仕事は、

以前と変わらせずにやってほしい。

町の家々の火の用心など

のことはかたく申し付ける。

やがて陣より戻ると思うが、

その時は命じたとおりであって

ほしいものだ。」

玄蕃

霜月二十四日 三長（花押）

松本宿

三郎右衛門どの

和泉どの

こちら（この表）とは肥前名護屋を示しています。松本宿の名主（肝煎）をしている、三郎右衛門と和泉に出した手紙です。このうち「和泉」は手紙の持ち主である松林さんのご先祖になります。数正が手紙を送った「右橋」と同一人物ということです。

名護屋での無事を知らせて、町の名主の仕事をおこたらないように、特に火の元の用心を指示しています。そしてもうすぐ陣から戻る（松本へ帰る）ことを伝えているのです。

ところでこの手紙はいつ書かれたのでしょうか。日付は「霜月二十四日」となっていますので11月24日なのですが、何年のことなのかがわかりません。長野県の歴史史料を集めた『信濃史料』では文禄3年（1594）の手紙とされています。しかしこれには問題があります。松本市の公式見解では松本城天守が完成したのは文禄2年～3年（1593～1594）です。文禄元年に数正が肥前に出兵してその年に亡くなります。康長は早くて天正19年に肥前に行っていますから、松本はまったく主人がいない状態です。数正のあとを継いだのは康長ですから、天守を完成させたのは康長ということになります。もし文禄3年の11月24日にまだ肥前にいたとすれば、康長は天守の完成を見なかった可能性が出てきます。天守は城主がいないまま完成したのでしょうか。

第1回の朝鮮出兵（文禄の役）は、文禄2年（1593）に休戦しています。ということは文禄3年の暮れまで名護屋にいる必要はありません。やはり康長が松本へ帰ったのは文禄2年の11月24日以後間もなくで、それから文禄3年にかけて天守が完成したと考えることができます。



写真は、二の丸への入り口となる太鼓門の石垣です。その中で特別に大きな石を「玄蕃石」と呼びます。名前の通り石川玄蕃頭康長が運ばせたという言い伝えがあります。このような石垣の普請からも分かるように、松本城が非常に強力な命令によって造られていた様子が伝わってきます。

玄蕃石についての伝説を紹介します。工事の過酷さを伝えているのでしょうか。

<玄蕃石伝説>

太鼓門の脇にすえるちょうどよい大きさの石を康長みずから石の上に乗ってお城まで運ぶことになりました。ところが、石を運ぶ人の中に一人、不満をいう者がいました。石川玄蕃頭康長は石から飛び降り、不満を訴えた者を呼び出し、大勢の前で首をはねました。槍をとるとその首を突き刺して高く掲げ、再び大石の上に飛び乗ると「ものども、さあ引け」と大声で号令をかけ、石を引かせました。

このようなことがあってから、この大きな石を玄蕃石と呼ぶようになりました。